

アガサ・クリスティの見たアメリカ

——伝記から探るアメリカ観の変容——

The USA Perceived by Agatha Christie:

Transformation of perception towards USA inferred from biographies

磯崎京子

Kyoko ISOZAKI

Abstract: Agatha Christie (1890-1976) is an English mystery novelist who described English life in her mystery novels. This study examines how she perceived the USA and clarifies how her perception of the USA was transformed from her childhood and youth through middle and old age. Agatha Christie's father was an American so that her perception towards the USA was positive in her childhood and youth. However, her perception towards the USA is transformed from positive to negative, from "wealth, good persons" to "a huge amount of money, insensitive" and for the worse to "inexhaustible money, violence, vulgarity", as she gets older and the USA becomes stronger in the world.

63

1. はじめに

ヨーロッパとアメリカはよく比較され、それはごく普通のヨーロッパ人の日常会話の中にもしばしばあらわれる。たとえば筆者がフランスに住んでいた時、けばけばしく派手なデザインの商品があると、フランス人は「これはアメリカ人向きね」と、ツンとして言った。また、イギリスに住んでいた時、物事の考え方を評して、イギリス人は「アメリカ人は浅いから」と、奥ゆかしく言った。ヨーロッパとアメリカとはつねに対比される運命にあるようである。

ではアガサ・クリスティ (1890-1976) はアメリカをどのように見ていたのだろうか。アガサ・クリスティは、名探偵ポワロとミス・マーブルを生み出したイギリスのミステリー作家である。名探偵ポワロはイギリスに亡命してきたベルギー人の元警部でうぬぼれの強いおしゃれな小男であり、ミス・マーブルはイギリスの静かな村に住む聡明で温厚な老嬢である。読者はポワロやミス・マーブルを通して、ミステリーの謎ときを楽しむとともに、穏やかな田園生活・お茶・ユーモア等、イギリス式生活の一端を味わうことができる。アガサ・クリスティの創り出す世界は最

もイギリス的なものとして、彼女の本からイギリスおよびイギリス人観を形成した読者は多いだろう。

しかし、アガサ・クリスティの父親がアメリカ人であることを知る人は少ないのではないだろうか。父親がアメリカ人であるということから、彼女はイギリスとアメリカという2つの文化を身近に接することのできる立場にいたといえよう。にもかかわらず、彼女の作品からはみじんもアメリカ的な雰囲気は漂ってこない。あたかも両親共に代々からのイギリス人であるかのように、彼女の作品はイギリスの色合いに満ちているのである。それはなぜだろうか。ここにアメリカおよびアメリカ人を彼女はどのように見ていたのだろうかという興味が湧いてくる。彼女の生涯をたどり、彼女のアメリカ観を考察してみたい。

アガサ・クリスティの一生を知るためにはまず彼女自身による自伝 (Christie, 1977) があり、また Morgan (1985) による伝記や、Underwood (1990) による彼女の業績や思い出をまとめた文献がある。その他にもアガサ・クリスティに関する研究書は数多くあり (Keating, 1977; Toye, 1980; Feinman, 1980; バーナード 1982; Sanders & Livallo, 1986; Osborne, 2000)、彼女の人柄や考え方をうかがい知ることができる。本稿はアガサ・クリスティの生きた時代と、彼女が経験する出来事を吟味しながら、彼女がアメリカをどのように認知していったのかを検討し、彼女のアメリカ観の変容を探るものである。

2. アガサ・クリスティとアメリカ

アガサ・クリスティのアメリカ観を、1. 幼少・若年期、2. 中年期、3. 老年期、に分けて、その変容を考察する。

(1) 幼少・若年期

アガサは1890年にイギリスの中産上層階級の娘として生まれている。ヴィクトリア女王が崩御するのは1901年であるから、アガサの幼少時代はヴィクトリア朝末期の優雅な時代である。有産階級ではハウス・パーティが盛んに催され、狩猟、釣り、競馬、テニス、クリケットと人々は社交を楽しんだ。アガサの父フレッドはアメリカ人である。フレッドの父はアメリカで大財産を築いた成功したアメリカ人であり、フレッドはイギリス人の妻クララとイギリスのデイベン州、トーキーにあるアッシュフィールド荘に住み、父親の財産のおかげで不労所得者として快適に暮らした。彼は気前が良くユーモアを好み、快活な紳士として土地の人々から敬愛されていた。アガサには姉マッジと兄モンテイがいるが、兄のモンテイとは10歳も歳が離れていることもあり、フレッドは末子のアガサを特に慈しんだようである。アガサは美しく広大なアッシュフィールド荘と広大な庭、両親の愛情、大勢の使用人達、そして犬に囲まれ、幸せな少女時代を送っている。当時のイギリス人にとってのアメリカ人のことをアガサは回想している。「わたしの父は、アメリカ人として自動的に“金持ち”になったと考えられていた。アメリカ人はみんな金持ちだと思われていた」(クリスティ, 1978a, p. 83)。アガサが11才の時、父フレッドは55才で他界する。アガサの生活もつつましくなるが、それでも当時のイギリス中産上層階級の娘の常として、15歳になるとパリの寄宿学校に入っている。そこにもアメリカからやってきたアメリカ娘達がいた。アガサは「私はアメリカ娘とつき合うのが特に好きだった。アメリカ娘達は何か生き生きとしたおもしろい話し方をするし、——」と述べ、また、パリの社交界では「私の父はアメリカに住んでいたことが知られていて、アメリカ人はみな相当なお金を持っているものと思われてい

た」(クリスティ, 1978a, p. 266, p. 271)と書いている。19世紀末から20世紀初頭にかけては、成功したアメリカ人が憧れのヨーロッパに来ることが流行しており、一般のヨーロッパ人にとっては、ヨーロッパにいるアメリカ人というすべてお金持ちという単純な図式、しかも好意的な図式が出来上がっていたのであろう。新興国アメリカからやって来る成功したアメリカ人を、自分達の弟分として寛容に受け入れるという、精神的なゆとりと自信が当時のヨーロッパ人にはあったのではなかろうか。幼年・若年期のアガサにおけるアメリカへの認知は、優しくて快活だった父親の思い出とともに「お金持ち、良い人」という好意的なものであったことが想像できる。

アガサは第1次大戦時代、看護婦・薬剤師として勤労奉仕し、1915年、空軍パイロットのアーチャーと結婚する。この頃からアガサはミステリー小説を書きはじめ、1919年に『スタイリズ荘の怪事件』を初出版している。1922年、アガサは夫アーチャーが大英帝国博覧会開催の宣伝のための使節団の一員となって世界一周の10ヶ月の旅に出ることになり、大喜びで同行する。途中、夫妻はホノルルで1ヶ月の休暇を楽しんでいる。しかし、アガサはホノルルが予想以上に俗化して物価が高いとは書いているが、それ以上のアメリカへの印象は述べていない(モーガン, 1987a)。

(2) 中年期

アガサが抱くアメリカへの認知は時代の経過とともに少しずつ変化していく。夫アーチャーの女性問題、母クララの死、アガサ自身の失踪事件を経て、アガサはアーチャーと離婚する。その後、アガサは中東への旅に出て14歳年下の考古学者マックス・マローヤンと出会い、1930年に結婚する。マックスと結婚後、彼女は毎年のようにオリエント急行による中東への旅に出ることになる。オリエント急行は贅沢の代名詞であり、大理石の浴室、ピロードの椅子、豪華な食事を備えている。1931年、オリエント急行はイスタンブールを出たあとの夜中の3:00頃、洪水のために止まってしまう。列車にはさまざまな国の人が乗り合わせているが、アガサはアメリカ人女性のことをこう記している。「アメリカ人のミセス・ヒルトンは、いかにもあの国の人らしく、当惑顔で言ったものです——“でも、どうしても手も打たないのですの？　これが合衆国なら、当然すぐにでも、代わりの車を走らせますわ——飛行機だってよこすかも——”しばらくして全員新しい列車に乗り移ったものの、食物、水、暖房がなかった。するとアガサは「例のアメリカ女性は、寝台車がなくなってしまって、どうやら、おそろしくおしゃべりなブルガリア女性と一晩いっしょになりそうだとわかると、とうとう我慢しきれなくなって、おいおいと泣き出しました。“娘は面倒なことはなにもないと申しましたのよ——ぜんぜん問題ないって。ヨーロッパ旅行はこれがはじめてですが、もうこりごりですわ”。わたしたちはみんなで彼女を慰めました」と書いている(モーガン, 1987b, p. 52, p. 54)。ここでアガサがアメリカ上流婦人の言ったセリフに対して「いかにもあの国の人らしく」と言っているのは、1930年代のアメリカ上流婦人の持つ、アメリカの近代設備・機能性・機動力への信奉への揶揄である。そして便利な機械文明に慣れたアメリカ上流婦人がオロオロする様を、アガサはイギリス人らしく物事の成りゆきと困難をむしろ楽しむ余裕を見せて皮肉っているように見受けられる。アガサの幼年・若年期におけるアメリカへの認知であった「お金持ち、良い人」という牧歌的ともいえる好意的な要素には、アメリカが第1次世界大戦(1914～1918)の戦勝国として、世界の中で圧倒的に勢力を伸ばしてくるにつれて、少しずつ複雑な色合いが加わっていく。

アガサのミステリー小説は次々とアメリカで大ヒットとなり、アメリカの出版社はアガサに高額な代金を支払っている。アガサのアメリカでの所得は、イギリスやその他の海外諸国からの収

入の総額をはるかにしのぐものであった。ところが1938年、アメリカの国税庁がアガサの税金について難題を言ってきて、アガサのアメリカでの収入はアメリカで凍結されてアガサの手許には届かなくなる。この問題はその後約10年続きアガサを財政的に悩ます（モーガン、1987b, p. 84）。1939年、イギリスはヒトラーとの戦争を開始する。1941年、アメリカの雑誌社がアガサの過去と2度の結婚を書き立て、アガサは「いまましい記事」と、その不作法さに腹を立てる。また、アメリカからのファン・レターには「アガサは悪魔みたいに頭の切れる、すてきなユーモアのセンスをもった美人」と、アガサ本人が思う内気な自己像とは違う、アメリカ好みの解釈が書かれていてアガサを苛立たせる（p.102）。第2次世界戦争中、アガサの家、グリーンウェイ・ハウスはアメリカ海軍によって徴用される。1945年、第2次世界大戦が終結する。同じく1945年に、ニューヨークではアガサの『そして誰もいなくなった』がルネ・クレール監督で映画化され、大ヒットを飛ばす¹。同じ頃、アメリカの雑誌編集者がアガサの『ホロー荘の殺人』を雑誌掲載用に短くするように要求してくる。作品全体を改変しなくてはならず、彼女は適当に作品をカットして送ったものの、「じっさい、うんざりします！」「まったく腹立たしい」とアメリカの商業主義にふりまわされる苛立ちを表す（p.137）。アメリカのニュース・レビューはアガサのインタビュー記事を載せるが、「ひどいものにも——わたしは赤毛で、父はアメリカの株仲間人で、わたしは世界でもっとも金持ちの女のひとりなんですって！——よくもこんな記事が書けるものです」とアメリカ人の無知と無神経を怒る（p.153）。アガサにとってアメリカは莫大な金の成る木であると同時に、つねに彼女を翻弄させ、なにかと神経をイライラさせられる国へとようになってきている。

アガサのアメリカへの反撃は年々激しさを加えていく。1951年、アメリカのエラリー・クイーンズ・ミステリー・マガジンの読者による国際投票で、アガサは現存のもっとも偉大な10人のミステリー作家の1人に選ばれる。その時のアメリカからの記念品は、アンティークのピストルがぶらさがった小さな木製の銘版だったが、それに加えて「黄色いモスリンの四角い布が数枚」送られてくる。「つぎ合わせてキルトにするので、サインして送りかえしてくれというのです」と、アガサはあきれる。そして、「ばかばかしい、“母乳銀行”じゃあるまいし！ アメリカ人というのは、物事の表現の仕方がすこしずれてるみたい！ 折り返し手紙を書いて、これはおよそ繊細さに欠けるアイデアだ——こんなことが習慣的に行われるのは、ソ連でぐらいなものだ、そう言ってやりたい気分です！」と憤慨する（p.197）。第2次世界大戦（1939～1945）の勝利を経て、世界一の強国という自信を揺るぎないものとしたアメリカの、あふれるエネルギーと無邪気ともいえる圧力にアガサは苛立つ。このように、中年期におけるアガサのアメリカへの認知は、「巨額の金、無神経」と言ってよいだろう。

1957年、アガサは夫マックスがペンシルヴァニア大学から金メダルを授与されるのに伴って、2度目のアメリカ旅行をする。

（3）老年期

アガサの名声はますます高まり、同時に彼女のアメリカへの批判もますます手厳しいものになっていく。1961年、ユネスコはアガサ・クリスティを現在英語で書く作家としては世界最高のベストセラー作家であり、彼女の本は102ヶ国（次点のグレーム・グリーンズの2倍）で売られていると報告している（モーガン、1987b, p. 51）。1963年、アメリカのMGM（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー社）がアガサの『オリент急行の殺人』を映画化したいと申し込んでくる。アガサはMGMが安っぽいドタバタ喜劇に仕立てるのではないかと強く危惧し、断固とし

て反対する。「あの本を映画にするには細心の計画とテクニックが必要なのです。それなのに、陽気な笑劇にでも変えられて、ミス・マーブルが機関士として活躍するようなことにでもなっごらんない。そりゃおもしろいでしょうけど、わたしの評判はいささか傷がつくでしょうね！」と憤慨する(p.265)²。続いて1964年、MGMはアガサの『ABC殺人事件』を映画化したいとして企画書を送ってくる。アガサは「私がぜったい許せないのは——ポアロが粗暴なギャングか私立探偵みたいにされてしまうこと——それにおびたしい暴力と残虐行為。これは私の主義の問題です。非情なタイプのスリラーは大嫌いですし、その手のものは、数えきれない害を与えてきたと思います。たぶん、そこまでは考えていないでしょうけど、わかるものですか。USAでは、そういうのがおおいにもてはやされているのですから。」と、アメリカの暴力好みに痛烈な批判をしている(p.269)。

1966年、夫マックスの講演に伴って、アガサは3度目のアメリカ旅行にでかける。プリンストン大学での一夜のことをアガサはこう記している。「だれもかれもがすごいお金持ちのようでした。講演を聞きにくるのにイヴニング・ドレスに白い手袋をはめ、みんな上品だけど、信じられないくらい高齢で病気がちなのです——夫たちは、大半病気で臥せっているか、さもなければ入院していましたし、私が話しをした人たちは、例外なく、全く耳が聞こえないか、中風か、視力が衰えているかでした。ある老婦人は、補聴器をつけ、ほとんど全盲に近く、88歳でしたが、わざわざ講演会場まで私達に付き添ってきて、私がころぶといけなから、そばでささえてあげると言って聞きませんでした」「とても毅然とした老婦人でした。そしてレセプションが終わると疲れたふうもなく、あいかわらず元気いっぱい帰っていきました」(p.279)。アガサの見たアメリカ婦人達は彼女にとってまさに驚きであった。アガサは「すさまじい女家長——烈女」と表現している。そしてアメリカの文化的原型を「仕事の鬼」と断じている(p.280)。アガサのアメリカへの驚きと批判はダラスにおいて頂点を極める。「ダラス——成り金の町。選りすぐりの聴衆を前に講演。精選されすぎ。借りてきた絨毯コレクションのすばらしい展示会があったのに、だれも絨毯についてはなにひとつ知らなかった——興味もないらしい——退屈な連中」(p.281)と切り捨てる。アガサにとって、アメリカはお金と活力はあってもなにも面白みがなく、彼女とは全く住む世界の違うところだったのである。老年期におけるアガサの抱くアメリカへの認知は、「巨万の富み、暴力、俗悪」となり、反撃するというよりは、むしろ突き放して戦いを放棄してしまったかのような印象さえ与える。

以上、アガサの抱くアメリカ観の変容を述べた。幼少・若年時代の「お金持ち、良い人」という、アメリカ人であった父への懐かしさを込めた牧歌的な認知から、中年期の「巨額の金、無神経」という苛立ちに変わり、老年期には「巨万の富み、暴力、俗悪」となって、アメリカへの興味をほとんど失っていく。アメリカの金と力は、アガサの初期においては、父のイメージとだぶって、安心を提供する暖かい保護者としての金と力であったのが、後にそれは、人間の果てしない欲望としての「金」と、自分の価値観を脅かす暴力としての「力」に変わっていく。アガサのアメリカへの否定的な方向への変化は、アメリカが世界一の圧倒的な強国となっていく流れと比喩しているのが興味深い。アメリカの世界を凌駕する経済力と機動力は、アガサにとって本の販売という意味においては必要ではあったものの、同時に彼女のイギリス的価値観と自尊心を脅かす、まさに暴力とも言える脅威でもあったのだろう。

アガサは1971年、イギリスから大英帝国2等勲爵士に叙せられ、1976年、イギリスの落着きと優雅さをひたすら愛しながら、イギリス人として死去する。

3. おわりに

アメリカ人の父をもつ、アガサ・クリスティの抱くアメリカへの認知の変容を考察した。アガサにとってのアメリカ観は、幼少・若年期の暖かくて優しいという肯定的なニュアンスから始まり、年齢を経るに従って徐々に否定的な色合いを濃厚に加えていくものであった。

一方、アガサが抱くイギリスへの認知は、年齢とともにさらに肯定的な色合いを加えていったように思える。ヴィクトリア朝末期に幼少時代を過ごし、エドワード朝時代に成人したアガサは、その時代のイギリス中産上層階級の婦人達もつ文化を終生愛した。田園、お茶、犬、ゆったりした時間、邸宅、家具、旅、ユーモアなどである。そして、アガサのミステリー小説の読者は彼女が提示するイギリス的なものに、無意識の内に引き込まれ、陶醉するのであろう。

アガサは1954年に、「告白」ノートにこう書いている。

好きなこと：日ざしを浴びてなにもせずにすわっていること。

大嫌いなもの：人込み、騒音、パーティ、過度のおしゃべり。(モーガン, 1987b, p.232)

また、アガサが晩年に好んだとして、次の詩が紹介されている。

わたしの持つ3つの宝、

これを護り、大切にしよう。

第一は、愛。

第二は、けっしてやりすぎないこと。

第三は、けっして世界一にはならぬこと。(アンダーウッド, 1990, p.98)

これらのノートや詩から、アガサが金と力とはいかに遠いところにいた人であったかがうかがえる。アメリカ人を父にもち、父を憧憬しながらも、アガサは年齢を重ねるにつれて、アメリカに対して葛藤のうちに濃厚に否定的な色合いを加えていった。これとは対照的に、あるいはアメリカと比較することによって自己のアイデンティティをより確かめていったかのように、アガサはイギリスに対してはさらに肯定的な色合いを加えていき、イギリスへの愛情への傾斜を深めていったといえるだろう。

註

- 1 『そして誰もいなくなった』は1975年にピーター・コリンソン監督によって、再び製作されている(アンダーウッド, 1990)。
- 2 結局、『オリент急行殺人事件』は1974年、アガサの最晩年にブレイトーン卿製作で上映され、重厚な仕上がりに彼女も満足する(アンダーウッド, 1990)。

参考文献

- Barnard, R. (1979) *A Talent to Deceive*, London: William Collins Sons & Co. L td. (小池 滋・中野康司 訳 1982『欺しの天才—アガサ・クリスティ創作の秘密』秀文インターナショナル)
- Christie, A. (1977) *An Autobiography*, London: Dodd Mead. (乾 信一郎訳 1978a『アガサ・クリスティ 自伝』(上) 早川書房、乾 信一郎訳 1978b『アガサ・クリスティ自伝』(下) 早川書房)
- Feinman, J. (1980) *The Mysterious World of Agatha Christie*, Calif.: Berkley Pub Group.
- Keating, H. R. F. (ed.) (1977) *Agatha Christie: First Lady of Crime*, London: Weidenfeld and Nicolson.
- Morgan, J. (1985) *Agatha Christie: A Biography*, London: Random House Inc. (深町真理子・宇佐川晶 子訳 1987a『アガサ・クリスティの生涯』(上) 早川書房、深町真理子・宇佐川晶子訳 1987b『アガサ・クリスティの生涯』(下) 早川書房)
- Osborne, C. (2000) *The Life and Crimes of Agatha Christie*, London; Harper Collins.
- Sanders, D. & Lovallo, L. (1986) *Agatha Christie Companion*, London: Random House Value Pub.
- Toye, R. (1980) *The Agatha Christie Who's Who*, London: Harcourt College Pub.
- Underwood, L. (Ed.) (1990) *The Agatha Christie Centenary Book*, London: Belgrave Publishing Ltd. (深町真理子訳 1990『アガサ・クリスティ生誕 100 年記念ブック』早川書房)